

20201002

私は学術会議にはタッチしたことがないし、東大総長選挙とも縁がなくなって久しいので、詳しい内情は知りようもないが、両者（とりわけ前者）に関する最近の報道は多くの人の不安や憤激を呼び起こしているようだ。この2件がほぼ同時に起きたのは偶然なのだろうし、ことの性質も大分異なるが、とにかく、「大学や学界は自立的な存在であるべきだ」という観念——そんなものはもともと疑わしかったという見方もあるが——が、建前の世界でさえも保持されにくくなってきていることを示すという意味では象徴的な出来事だと感じる。どちらもそれ自体としては少数の人たちにしか関わらないことであり、直ちに全社会的な帰結をもたらすものではないかもしれないが、社会全体の深部での変化を象徴しているのではないだろうか。

（余談）。学術会議の任命拒否に関して「直ちに学問への介入を意味するものではない」という木で鼻をくくったような応答をした新官房長官の加藤勝信は、昨年2月の故・大沼保昭氏を偲ぶ会に出席しているのを見かけた覚えがある。多忙を極める国会議員がわざわざ駆けつけるのだから、相当親しかったのだろう。それがどういう意味を持つのかは分からないが、とにかく心覚えまでに記しておく。

20201009

「総合的・俯瞰的」という言葉は何も言わないに等しいから、要するに「説明など不要。いくら反対運動があっても、決まったことは決まったことだ」とつっぱねるといのが政府の肚であるように見える。そういう強硬姿勢で乗り切ることができるという目算を彼らなりに持っているのだろう（安倍政権期以来の趨勢として、個別の問題で種々の批判運動が一定の盛り上がりを見せても、全体としての政権支持率は高水準にとどまり続けてきたという「実績」に基づく自信だろうか）。

政府がそのような「説明不要」という態度を取っているときに、さまざまな人たちが、いわば「外野からの説明」を提出している。「そもそも学術会議というものに大きな問題があるのだ」と指摘して、だから政府が介入するのも当然だと示唆する類いの言説である。この種の言説のなかには雑多な種類のものが並存している。あからさまな偏見・誤解・誇張に基づくものがある一方、あながち間違いとは言いきれない指摘も一部にはある。前者については然るべく反論するしかないが、後者をどのように受けとめるかは、政府介入の正当性とは別個に考えるべき問題だろう。その反省が欠けると、「学者の独りよがり」といった世間一般からの冷やかな視線を跳ね返すことができず、自ら孤立を招く結果になりかねないのではないか。

20201021

坂野潤治氏（1937-2020年）。

坂野さんとはじめて知り合ったのは、私が東大社会科学研究所（社研）の助手を務めていた1979-82年のことだから、かれこれ40年ほどのつきあいになる。当時の社研では、教授会メンバーと助手（今の助教）の間の距離が小さく、上下関係というよりも「歳は違っても同じ研究者仲間」として遇する雰囲気があり、坂野さんも私のような駆け出しを親しい後輩の一人として扱ってくれた（そういう関係に慣れた後に法学部に移ったら、ずいぶ

んと勝手に違って、大分戸惑った)。かつて学生運動に関与した経験があるという共通性も親近感の一つの要素だった。専門の日本近代史に関しては、私の予備知識が乏しすぎて、最初のうちはとても議論を交わすような関係ではなかったが、その後、長い間に彼の本を多数読み、折に触れて会話を交わしたりする中で、多くのものを吸収し、専門は違うながらも大分影響を受けた。坂野さんの学風は、一次史料を堅実に踏まえるという実証史学の正道を行くものだというのは誰もが認めるところだが、ある時期以降、一見禁欲的な実証史的記述の行間に、現実政治への強烈な問題意識をにじませることが増えてきた。大学院で人文社会系研究科だけでなく法学政治学研究科をも担当し、大勢の若手政治学者たちと接したことも、その傾向を強めたのかもしれない。坂野さんの歴史観（あるいは政治観）は論争喚起的なもので、賛否両論があった。時間を経る中での微妙な変化についても、円熟ないし進化という評価がある一方で、退歩ないし墮落という批評の声を聞いたりもした。そうした両義性と論争性は研究者にはつきものであり、私自身にとっても他人事ではなかったから、固唾をのむような感覚で彼の軌跡を追ってきた気がする。ごく最近いただいた『明治憲法史』は結果的に最後の著作ということになったが、こういう論争的な作品を亡くなる直前まで書くことができたというのは、研究者として幸せな人生だったのだろう。私の仕事にも結構関心を示してくれていたのも、現在最後の追い込みにかかっている拙著が完成したなら、是非坂野さんにもお目にかけて、感想を伺いたいなどと考えていたのだが、それも叶わぬ夢となってしまった。間に合わなかったのが残念だ。

20201108

アメリカ大統領選挙は開票が大分長引いたが、どうやらバイデン当確という暫定結果が出たようだ。この選挙については事前に多数の予想が出ていて、その中には当たったものと当たらなかったものがある。

予想の当たり外れということで先ず4年前の前回選挙の時を思い出してみると、多くの世論調査はいわゆる「隠れトランプ票」の大きさを読み損ね、そのために予測を誤ったことが指摘されている。今回はその失敗を教訓化して、より精密な世論調査をしたから、誤差はずっと小さいはずだと言われていた。ところが、蓋を開けてみると、やはり今回も「隠れトランプ票」を読み切れておらず、予想がかなり外れたようだ。世論調査およびそれに基づく予測というものの難しさを改めて痛感させられる（追記参照）。

バイデンが当確となってからも、トランプは敗北宣言を出さず、訴訟作戦などの形で抵抗を続けている。このこと自体はかねて予想されていたとおりで、驚くに値しない。問題は、その抵抗がどの程度強烈に繰り広げられるかにある。一つのシナリオとしては、長期にわたって次期大統領が決まらないという政治危機が続き、その中で、局地的には暴力沙汰が起きたりして騒然たる状況が続くだろうというものがある。他方では、案外トランプ陣営は腰砕けして、むなしい抵抗を短期間試みた後にすんなりと退場するのではないかという予測もある。この2つのシナリオは単純な二者択一ではなく、両者の混合ということも考えられる。その混合において第一の方の割合が高ければ高いほど、民主政治の基礎は深く傷つけられるということになるだろう。

一般に選挙というものは、直接には誰が（あるいはどの政党が）勝つか負けるかが最大の関心事であり、それに伴って選挙後にどのような政策が採られるかが取り沙汰される。し

かし、いわばその手前の問題として、「ゲームのルールを尊重する」という態度がどの程度安定的に維持されるか、それともそれが揺らぐかということが基礎的な重要性を持つ。

「ゲームのルールなどどうでもよい。どういう形をとってでも、とにかく勝ってしまえばよいのだ」といわんばかりの態度が、アメリカを先頭として、日本を含む世界各地に広がってきたというのがこの間の状況だが、それが今回さらにもう一歩進むのかどうか、それとも辛くも踏みとどまるのか、その点が何よりも気にかかる。

(11月9日の追記)。その後、今回の選挙では前回に比べ誤差は小さかったのだという指摘に接した。開票の早い段階ではトランプ票が先行して開いたために、世論調査との誤差が大きく見えたが、後の方まで含めてみると、驚くほど誤差が小さかったという。調査の当たり外れ自体が、そう簡単には見極められないということのようだ。

(11月16日の追記)。その後、さらに新しい分析として、世論調査にはやはり無視できない誤差があり、トランプ票を読み損ねていたという説に接した。誤差がどのくらいあり、その原因はどこにあるのかといった点をめぐって、専門家の間でも簡単には結論を出せないようだ。

20201218

2つの書評。

去年から今年にかけて、かなり広く話題を呼んだ新書本がいくつか刊行された。野口雅弘および今野元による2つのウェーバー（ヴェーバー）本と大木毅『独ソ戦』はそのうちの代表的なものである。私はこれら三冊をどれも興味深く読んだが、それぞれの主題を本格的に研究しているわけではないので、どのように受けとめるべきか考えあぐねる面があった。いくつかの書評や感想・コメントの類いも（あるものは活字で、ある者はネット上で）読んだが、その大半は無難な紹介か社交辞令的な賛辞にとどまっていて、食い足りないという気がしていた（今野本に対しては、感覚的に受け付けられないといった感じの反撥もいくつかあったが、それらも本格的な批判ではない）。そうした中で、最近になって、これらの著作を正面から論評した書評が相次いで現われた。

その一つは、2つのウェーバー（ヴェーバー）本に関する佐藤俊樹氏の書評（『UP』2020年12月号）である。佐藤氏は野口著と今野著を対比して、その共通性と対照性を手際よく整理している。特に注目されるのは、ウェーバーの政治思想に関して、「一見対照的な二人の著者のウェーバー像は、むしろ重なってくる」と指摘している点である。それはウェーバーの「書いていることと実際にしていることに矛盾がある」点や、「強い人間ではなく、むしろ強い人間だと思われない人間だった」ために「場当たりの自己正当化にも走ってしまう」点への注目である。このように書くと、ウェーバーに対する強い批判（あるいは非難）のように響くかもしれないが、そうではない。佐藤氏によれば、ウェーバーは経験的な社会学者であり続けたが、現実の制度は特定の思想には還元できないし、一つの政治的主張で貫かれるものでもない。ウェーバーは「全てを一つの原理で裁断するのではなく、局面ごとに適用できる基準を複数見つけ出せる。それゆえ、いくつかの立場の間を揺れ動いたり、場当たりの自己正当化に走って他人を攻撃したりもするが、だからこそ現実の制度の多様性と多面性をうまくとらえられた」というのである。これは私の知る限りでは相当新鮮な見解だが、推察するに、社会学者である佐藤氏にとっては、ウェー

バーを強いて特定の思想なり理念なりの型に当てはめて理解する——あるいはその型からの逸脱を見つけて非難する——のではなく、多面的な現実を分析するための多数の道具立て——そこに相互矛盾するものも含まれるが、それぞれに切れ味鋭い——を見出すことが重要だということではないかという気がした。

もう一つは、大木毅『独ソ戦』に関する横手慎二氏の書評（『ユーラシア研究』第 63 号、2020 年 11 月）である。大木著については、これまで多くの人が絶賛に近い評価を発表しており、横手氏もその意義を認めている。ただ、この書評では、むしろ本書の限界の指摘が大きな位置を占めている。横手氏によれば、大木著は「ソ連側よりドイツ側資料に依拠」してきた欧米の研究に基づいている。そこにはそれなりの意義があるが、ソ連側史料およびそれに基づくロシア・ソ連の研究を多数読んできた横手氏の観点からはかなり一面的だというのが批判の要点のようである。この書評では、そうした問題点が数点にわたってかなり詳しく述べられている。大木著の意義を否定するわけではないにしても、異なる観点からの突き合わせが必要なのに、その作業が欠けているということのようである。

私自身はウェーバーについても独ソ戦についてもそれほど通じているわけではないので、この 2 つの書評がどこまで当たっているのかを判定することはできない。それはさておくと、社交辞令的で無難な紹介にとどまらない論争的な書評によって一石を投じたことの意義は大きいと思う。せっかく投げられた一石を受けて活発な討論が展開されることを期待したい。